



【ムンシー・ナワルキショール】(1836-1895)
近代インドの出版・文化活動への貢献面で、極めて重要な役割を果たした出版社の創設者。彼の出版社より出版された資料を、本学と東大東洋文化研究所の合同調査団が調査・収集し、デジタルアーカイブズのひとつとしてデジタル化した。



Rāmāyaṇa
(アワディー語、ヒンディー語図書)
[SARDA-NKH/929.831/156983]



Tarjumah-yi tāri kh-i firishtah-yi Urdu
(ウルドゥー語図書)
[SARDA-NKU/225.04/176811/1]

目次

■ 館長巻頭言「知の森の探索へ」	2
■ コレクション紹介「菊地昌典文庫について」	3
■ 特集「附属図書館デジタルアーカイブズの御案内」	4
■ 寄稿「ハワイ大学のKajiyama Collection」	8
■ 附属図書館講演会報告(平成16年度) 知と技のつどうところ — 図書館と博物館と博覧会 —	9
■ 海外研修報告	10
■ 図書館統計	11
■ 平成16年度後期図書館活動日誌	12
■ 編集後記	12

「知の森の探索へ」

附属図書館長 富盛 伸夫

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

皆さんがこれから共に学んでゆかれる東京外国語大学の特色の一つは、世界各地の社会・文化・言語の研究を英語等の媒介言語に頼らず、直接相手の言葉で懷に飛び込んでいけることです。新たに学ぶ未知の言葉から自分の世界が相対化され、国境線や民族主義や個々の言語文化の枠を越えて、新たな水平線の拡がりを見出すことでしょう。特に、他の大学では決して学ぶことができない、国際社会でも高く評価される多様なインターフェイス能力を身につけてほしいと思います。

人間が言語を獲得したことは地球の生命の歴史における奇跡といえます。遠い先祖の時代から人間は言葉と文字によって記憶を定着させ、知の体系を継承してきました。輝かしい文明の記録とともに、争いや略奪・差別等の人類の負の歴史もまた、目をそらしてはなりません。言葉によって語り継がれる、貴い、あるいは苦い体験と記憶から私たちは明日への英知と勇気を学ぶことができます。人類の知的財産の集積庫である図書館は、時間と空間を超えて私たち人間の精神文化のすべてが手に届くところにある、知の森であります。

現在、日本の大学図書館のそれぞれが大学の特色を生かした図書館作りをしています。図書館は人類の知の継承を担う公共財であり、地球の未来に向けた知と感性の発信基地としても機能する必要があります。地域に密着した災害予防・復興支援、子供図書館、古

文書のデジタル化など、他大学図書館で様々な取り組みがあるなかで、本学附属図書館は地域との連携はもちろんですが、構想の射程を地球社会との共生にも向けています。世界各地に所蔵される現地資料のデジタル化と公開は、本学ならではの電子図書館構想です。これに加えて、26専攻語をはじめ世界のほとんどの言語・文字体系のカバーを目指す多言語対応の図書情報検索システムは、国立大学図書館における特色ある取り組みとして、平成16年度に文部科学省から高く評価されました。また、国立情報学研究所への新規書誌レコード登録件数は、年間12,000件を超え、全国の大学の中でも上位にランクされました。

附属図書館は、本学の一員となられた皆さんの勉学を全面的に支援する環境を整えています。60万冊以上の図書資料は、開架式書架に配架されているので手にとって内容を確認できます。また、約200台の情報端末（パソコン）に加え、充実した周辺機器やマルチメディアソフトウェアをそろえることにより、人文系大学図書館としては最先端の設備環境を備えています。2階入口のカウンターでは、文献複写依頼をはじめ利用者の皆さんからの様々なニーズに対応していますので、気軽にご相談ください。平成16年度には、一日あたりの利用者数が3,000人を超える日もありました。

あわただしい大学生活のなかで、静かな自分に向かうひとときを、古今東西の書物に囲まれながらゆったりと過ごしてください。

菊地昌典文庫について

本学外国語学部教授 高橋 清治



菊地昌典氏は、1930年生れ、ロシアの歴史的考察に取り組まれ、東京大学（1966-90）等でロシア史、ソ連政治を講じられた。1997年5月に急逝された後、御遺族から御蔵書寄贈のお申し出があり、本図書館で有難くお受けすることとなった。本学のキャンパス移転にともなう図書館の移転と整備もあり、2004年4月ようやく菊地昌典文庫として開設し、学内外の利用に広く供することとなった。

菊地文庫は、ロシア関係、特にロシア史関係が中心であり、総数5,755冊、うち露語図書が3,940冊を数える。広範な御蔵書をお受けするにあたり、収容スペースを考慮し、ロシア史関係の露語図書を最優先とし、和書についてはかなり限定的にしぼらせていただいたのである。なお、日本関係の和書は中国の遼寧師範大学（大連市）に寄贈されている。

時期別でみると、ロシア革命、スターリン時代に関するものが特に多く、氏の問題関心を如実に反映している。

文庫から一点ということで、1911年モスクワのスイチン社から出された全6巻の農奴解放50周年の記念出版『大改革』[菊地文庫/24/1.1-1.6]をとりあげてみよう。

クリミア戦争（1853-56）に敗北した後、ロシア帝国では一連の改革が試みられた。国家主導の工業化促進策、農奴解放、ゼムストヴォ導入、司法改革等、多岐にわたるし、支配層内のせめぎ合いで日の目を見なかった改革案もあった。同時代的にも、その後も、これらをどう評価するかは論争的問題であった。自由主義派は「偉大な」改革とその成果を称讃して「大改革」と呼んだのである。

90年代から版を重ねていたジャンシェフ著の『大改革時代』では「改革」は複数形である。

我々の手許にあるこの記念出版は「過去と現在におけるロシア社会と農民問題」を副題とし、農奴解放にしばっている（「改革」は単数形）。表紙は「大改革」「1861年2月19日－1911年」の文字と、「断ち切られた鎖」「<2月19日>と書き上げる羽根ペン」のイラストを組み合わせたデザインとなっている。

扉には刊行主体の「技術知識普及協会・教育部・歴史委員会」と、3名の編纂者が掲げられている。3名とも1875～79年生れの若い世代の歴史家である。デヴェレゴフ（後にカデット党中央委員、十月革命後は政治から離れ、学究活動）、メリグノフ（後にエヌエス党幹部、23年亡命しボリシェヴィキ批判の論陣）、ピチェタ（後にソ連科学アカデミー正会員）。

各巻、十数本の論文を掲載し、総頁数は1,700頁を超える。自由主義派歴史家による50周年記念の書である。我々にとって近代ロシア史の貴重な資料となる挿絵も豊富であり、第6巻末尾には挿絵の総索引が付されている。

図書館カウンターに『菊地昌典文庫目録』の冊子体（分類目録）とCD（データベース）が備えられている。今年度、遡及入力が行なわれ、OPAC、NACSIS Webcatで検索することができる。

御寄贈にあたためて感謝し、菊地文庫が広く有効に利用されることを期待したい。

【編集注】本文中『大改革』と紹介されております図書のロシア語タイトルは『Великая реформа』です。検索の際、ご参考ください。



附属図書館デジタルアーカイブズのご案内 (TUFS-Library Digital Archives)

▼
附属図書館

この度、附属図書館初のデジタルアーカイブズが完成しましたので、利用者の皆様にお知らせします。

トップページ



図書館ホームページから、「東京外国語大学附属図書館デジタルアーカイブズ」をクリックすると、二種類のアイテムが表示されます。ひとつはメインタイトルになっている「南アジア史資料デジタル・アーカイブズ(SARDA＝読みはシャルダー)」であり、もうひとつは「A・A研アジア系資料画像カード目録検索システム」です。以下、順を追ってご説明します。なお、いずれのアイテムもイメージデータ（原本の画像情報およびカード画像）の表示には、DjVu（デ・ジャ・ビュー）が必要です。まずお使いのコンピュータにSARDA検索の画面もしくはカード目録検索システムの検索方法選択画面から、DjVuのインストールをお願いします。

1 南アジア史資料デジタル・アーカイブズ(SARDA)

URL <http://www-libdig.tufs.ac.jp/navalkishor/japanese/index.html>

SARDAは、「ナワルキショール・コレクション」と「インド・パーキスターン宗教関係文献」に大別されます。これらは、昭和46・48年の両次にわたる東京外国語大学・東京大学東洋文化研究所合同海外学術調査団によって収集された文献です。ナワルキショール・コレクションは、19世紀末から20世紀の前半にインドの学術文化の振興に指導的役割を果たした、ナワルキショールという出版社の出版物であり、インド・パーキスターン宗教関係文献と共に今日では入手困難な貴重書が多く含まれています。これらの南アジア関係資料のコレクションは、世界的に見ても高い学術的

価値を有するにも関わらず、所蔵する学術機関が少なく、かつ酸性紙のため劣化の危機にさらされています。SARDAは、これら貴重な資料の保存手段として画像化を選択しました。タイトルページと目次のみを画像化した文献もありますが、ナワルキショール社の著作権が切れたものを中心に全文画像化を図りました。さらに、南アジア研究者垂涎のナワルキショール社出版台帳も画像化されていて、同社の出版活動の全貌について窺い知ることができます。なお、各言語の翻字表「ALA-LC Romanization tables」は、蔵書検索システム(OPAC)の検索画面から閲覧できます。

SARDAを検索して画像表示をクリックすれば、原文画像を見ることが出来ますが、SARDAの図書はOPACでも検索可能なので、まずOPACで検索してから、このアーカイブズで原文画像を見る方法もあるでしょう。すべての図書に対してでは

ありませんが、原綴りによる検索もできます。「SARDA」で始まる請求記号の図書は、すべてこのアーカイブズの図書です。さらにナワルキショール・コレクションには、和文ページにも英文ページにも解題をつけてあります。

検索結果からの画面表示について

The diagram illustrates the user interface flow for SARDNA. It starts with a search results page showing a list of books. Two callouts point to buttons on the right side of the list:

- 「画像表示ボタン」をクリックすると、原文画像表示画面へ遷移します (Clicking the 'Image Display Button' leads to the original image display screen.)
- 「詳細ボタン」をクリックすると、書誌情報画面へ遷移します (Clicking the 'Detail Button' leads to the bibliographic information screen.)

Arrows indicate the navigation paths. One path leads from the 'Image Display Button' to a thumbnail image of a book cover. Another path leads from the 'Detail Button' to a detailed bibliographic record page.

解題
シーア派イマームの歴史 第一巻 / ミルザー・カースィム・アリー編

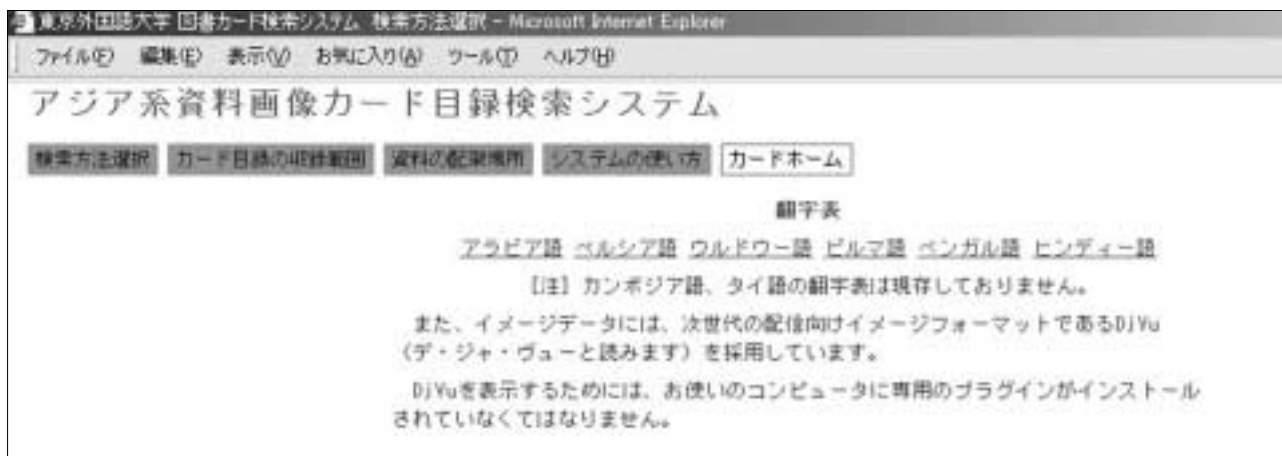
書名/責任表示	Nuzhat al-maṣā'ib / mu'allafah-yi Mirzā Qāsim 'Alī; naẓar-i ʿānī Janāb Mamdūh
巻冊次	jild-i 1
版	
出版事項	Lakhna'ū : Naval Kishor, 1909-1910
シリーズ名	
著者標目影	Qāsim 'Alī, Mirzā
請求記号	SARDA-NKU/167.8/157135/1
図書ID	0000282041

このデジタルアーカイブズにより、世界中のどこからでも閲覧が可能となり、学術資源の公開と共有化が実現されています。多くの図書館のデジタルアーカイブが、本邦郷土資料・古文書等をテーマに選んでいるのに対し、この企画は本学ならではのものと言えます。

なお、SARDA実現のために様々な形でご支援くださいました、本学ヒンディー語・ウルドゥー語研究室ならびに21世紀COE「史資料ハブ地域文化研究拠点」に、この紙面を借りて御礼を申し上げます。

文献の内容詳細については、『Castalia創刊号』にウルドゥー語の麻田豊先生の紹介文があり、SARDAのトップページにも、プロジェクトリーダーの藤井毅先生の解説が収録されていますので、そちらをご覧くださいと思います。

また本稿執筆中に訃報に接しました鈴木斌先生のナワルキショール研究論文2本（1本は田中敏雄先生との共同執筆）も、同じくトップページで画像として閲覧できますので、興味がお有りの方はどうぞご覧ください。



本学附置研究所であるアジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）蔵書の遡及入力、アジア・アフリカ地域を研究対象とする欧米図書についてはかなり進んでいますが、本来の表記＝原綴りによる図書はまだその多くが未登録であるため、本学OPACや国立情報学研究所（NII）の総合目録（NACSIS-Webcat）など、インターネットを介しての目録検索はできません。

この目録検索システムは、その間隙を埋めるために、これらアジア系諸言語によるカード約5,000枚を画像化し、ローマ字翻字形の書名・著者名から検索できるように企画したものです。学外からインターネットによってAA研のアジア系図書の検索をご希望の方は、直接本システムにアクセスしての検索をお願いします。

各種言語の翻字に使用したAA研独自の翻字表は、システムのトップページに言語毎に画像掲載してありますので、検索前にご参照ください。これもSARDAと同様に検索して画像表示をクリックすると、書誌情報が記載されている目録カードが表示されます。

なお翻字表は、日本および欧米図書館界で標準的に利用されている「ALA-LC Romanization tables」とは微妙に異なっていますので、検索にあたっては、この点を十分にご注意ください。

<翻字比較例>

ALA-LC: Rāmacaritamānasa / Tulasīdāsa

AA研: Rāmacaritamānas / Tulsīdās

目録カード表示例



☆詳しい検索方法や資料の利用につきましては、附属図書館2階カウンターまでお問い合わせください。

デジタル化された「ナワルキショール・コレクション」

本学外国語学部助教授 麻田 豊

このたび、本学附属図書館デジタル・アーカイブズの一環として、「南アジア史資料デジタル・アーカイブズ (SARDA)」が公開される運びとなった。ここには1970年代はじめに東京外国語大学・東京大学東洋文化研究所合同海外学術調査団によって収集された貴重な文献群「ナワルキショール・コレクション」(987冊)と「インド・パーキスターン宗教関係文献」(1,910冊)が収められている。検索はもとより、全文献の表紙と第1ページの画像も閲覧可能となった意義は大きい(一部の文献は全文画像化)。なかでもナワルキショール・コレクションは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて出版されたウルドゥー語・ヒンディー語・ペルシア語・アラビア語による文献の集積で、歴史的にも学術的にもきわめて高い価値を有している。調査団によって写真撮影されたナワルキショール出版社の出版台帳の全ページが画像化され、同社の出版活動の全貌がここに明らかになった。筆者は本誌第1号でコレクション全般について触れたので、今回はこのコレクションを世に送り出した19世紀のインド出版界の巨人について紹介する。

創業社主のムンシー・ナワルキショール(Munshi Newal Kishore, 1836-1895)はデリー南南東140キロ、マトゥラー近郊のバラモンの家庭に生まれたヒンドゥー教徒であったが、1858年、ラクナウ市(現在のウッタル・プラデーシュ州都)に移り住み、弱冠22歳で同市に「Newal Kishore Press and Book Depot」を設立し、ヒンドゥー教やイスラームなどの宗教の枠にとらわれる

ことなく広範な分野にわたる学術出版活動を開始した。サンスクリット語、ヒンディー語、ウルドゥー語、ペルシア語の古写本を渉猟しそれらの校訂本を出版するとともに、イスラーム関係の宗教書をヒンディー語に、また逆にヒンドゥー教関連書をペルシア語やウルドゥー語に翻訳させたりもした。存命中に4,000冊以上の出版物を世に出したと言われ、その功績は高く評価されている。その市場は中央アジア、アフガニスタン、中東にまでおよんだ。北インドで最初のウルドゥー語日刊新聞『Oudh Akhbar』や英語週刊新聞『Oudh Review』も創刊した。

1871年には北インドで最初の製紙工場を創業するなど、先駆的経営手腕を発揮した。ウルドゥー詩壇の長老ミルザー・ガーリブほか多くの文学者や知識人と親交を結んだ。1875年、ラクナウ市議会最初のインド人議員に任命され、1877年、教育分野での功績が認められ「インド皇帝(Kaiser-e-Hind)」勲章を、さらに1888年には「インド帝国勲爵士(C.I.E.)」の称号を授かった。ナワルキショールにたいする崇敬の念いまだ消えることなく、1970年には没後75年を記念してインド郵政省は記念切手を発行し、彼の功績を顕彰した。さらに2000年にはラクナウ市のClarks Avadhホテルの近くに銅像が建てられた。

文学者アブドゥル・ハリーム・シャルルは20世紀初頭にこう述べた。「ナワルキショール出版社は文学界の扉を開く鍵であり、この鍵を使わず文学界へ入ることはできない。」

ハワイ大学のKajiya Collection

留学生日本語教育センター教授 内海 孝

1998年4月のことである。

角田柳作というひとを書くはめになった。かれがハワイに滞在したことがあり、そのことについて書くように、鹿野政直と佐藤能丸の両氏に懇請されたからである。

角田柳作(1877-1964)のことは日本では知られていない。だが、かれの弟子のひとりドナルド・キーンは高名である。

キーンはアメリカのコロンビア大学で日本文学を講じ、三島由紀夫などの翻訳者でもあるが、キーンは1963年5月、自分の恩師である角田柳作のことを知ってほしいと『文芸春秋』で訴えたものの、いまでも変化がない。

コロンビア大学で「センセイ」といえば、角田のことを指した。かれは1930年ころから約30年余、日本学を講じながら、同大学の東アジア図書館の礎をつくりあげた。

かれは群馬県で生まれ東京専門学校(現早稲田大学)を卒業後、福島県立福島中学校や宮城県立仙台第一中学校の教諭をへて、1909年の春、ハワイに渡った。

ホノルルの、日本人移民の子弟を教育する「布哇〔ハワイ〕中学校」の校長として招聘されたからである。その後、17年に、ニューヨークへ移るまで、ハワイで活動した。

そこで、わたくしはハワイ調査に行った。

ハワイ大学ハミルトン図書館も調査地のひとつであった。アジア部門の責任者に来意を告げると、特別文庫も自由に閲覧することを許された。

案内され“Kajiya Collection”の表示が目についた。ウム、、、カジヤマ。

小説家の梶山季之か。それしか思い浮かばなかった。調査しおえ、先の責任者に確かめると、そうであるという。

なぜ、梶山季之の蔵書が文庫としてハワイ大学

にあるのか。それも、日本植民地時代の朝鮮や台湾、日本人移民の関係資料が多数をしめている。

帰国し木村健二氏に尋ねると、梶山美那江編『積乱雲・梶山季之——その軌跡と周辺』(季節社、1998年)を紹介される。

書店に注文するが、売り切れ。なおいっそう読みたくなる。美那江夫人にお手紙でいきさつを書くと、送られてきた。お礼とともに本学の附属図書館にもご寄贈を願った。

美那江夫人の、緻密な梶山季之の「年譜」とその「行間」作業が光る。荒正人編『漱石研究年表』以来の驚きであった。

梶山季之(1930-75)は朝鮮総督府の技師の父と、ハワイ日本人移民の子であった母とのあいだに、京城(いまソウル)で生まれた。京城の小学校の、3級下に五木寛之がいた。

梶山は、父の出身地である被爆地広島、母の生まれ故郷ハワイ、みずから生まれた朝鮮半島を舞台にして、全20巻のライフワークとして書く構想をたてていた。その収集された関係資料の山がハワイ大学のKajiya Collectionなのである。

だが、梶山は序論を書きあげたところで、取材先の香港で急逝してしまった。

本年5月は、梶山没後30年である。わたくしは熱心な読者ではないが、植民地時代の朝鮮を主題にした『族譜』(1952年初出)に好感をもつ。今後、Kajiya Collectionの恩恵をえながら、研究を深めたい。

【編集注】本文でご紹介のありました資料のうち、当館所蔵資料をお知らせします。
『積乱雲・梶山季之——その軌跡と周辺』
請求記号：A/9A-4/497810
『漱石研究年表』
請求記号：A/9A-8/N274-3/11

知と技のつどうところ

— 図書館と博物館と博覧会 —

国立西洋美術館長 樺山 紘一

図書館と博物館と博覧会は、それぞれに役割が異なっているが、それらがどういう風に出来上がったのか、近代社会の中でどんな役割を果たしてきたのか、また、その未来はどうなるのかについて述べたい。

図書館は、古代エジプトやメソポタミアの時代から書物の集積場として機能し、写本室の時代を経て、18世紀半ばには近代的な大規模図書館の創設となった。そこは近代文化を創り上げていく手がかりとして、知識がつどう場所であり、知識が開発され伝達される場所でもあった。図書館と並行して博物館が生まれた。18～19世紀のヨーロッパ社会は、世界中の文物に興味を示し、それらを収集、分類、展示した。そうした文物が後に博物館の収藏品となった。同様に美術品が集められて美術館となり、同時期に植物園や動物園なども誕生した。博覧会は、1851年のロンドン万国博覧会に先んじて、ヨーロッパ各地で勸業博覧会が数多く開催された。農産物やその加工品、陶磁器、織物さらには絵画、彫刻までもが出品されていた。新しく価値あるものを作り出し、それを展示する場である博覧会は、ヨーロッパの近代文化を非常な速度で発展させてゆく原動力となった。

一方、日本でも明治維新後に同様のことが起きた。1877年（明治10年）に第1回内国勸業博覧会が上野公園で開催され、大変な盛況ぶりであった。そこで展示されたものなどを常設しようとする機運が高まり、博物館が作られた。その後、上野には図書館、美術館、動物園、美術学校など知と技の装置が相次いで設立され、それらが日本の近代国民文化を作り上げてきたと

言っても過言ではない。

図書館と博物館と博覧会は、啓蒙と技術を結びつける装置として、それぞれを頂点とするトライアングル（三角形）の関係を築きつつ近代を支えてきた。しかし今、賞味期限が過ぎたのではないかとの議論がある。だが情報がデジタル化されつつあっても、図書を含む情報を収集・整理・蓄積・提供する場所として図書館は必要である。美術館・博物館もデジタル情報を発信してはいるが、本物を見たときは感動が違う。例えば絵画はキャンバスと額縁からなる立体的な存在であり、デジタル情報で見ると平面的なものではない。来館者が一緒に鑑賞し、勉強できるという共同性をも確保している博物館や美術館が無くなることはない。博覧会についても、その機能は依然として健在だと考える。

しかし、今日の状況は旧来の関係だけでは成り立たなくなっている。トライアングルではなく、外側にもう一つ頂点を加えたロンバス（ひし形）の時代と言えよう。その4つ目の頂点として教育研究機関、例えば大学が挙げられる。従来、大学の役割は大学の中だけで完結すると考えられてきたが、これからは外部との多様な連携がますます必要になってくる。そして、そのことが大学の質を向上させると同時に、知と技全体を新たな枠組みの中で開発させていくことになるだろう。

（文責 高杉 泰穂）

【編集注】本稿は、平成16年10月27日に開催された附属図書館講演会の要旨です。



多言語資料：イギリスの図書館の取り組み

附属図書館

附属図書館は、本学21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点（以下英語略称C-DATSと表記）」と密接な協働関係を構築し、その活動を支援しています。この度、C-DATS事業の一環として、附属図書館職員2名が、イギリスの図書館を訪問し、アジア・アフリカの地域・言語担当者と面会する機会を得ました。各館における多言語資料の収蔵状況について伺うとともに、C-DATSおよび附属図書館の取り組みを紹介し、意見交換などを行いました。

期 間：平成17年2月7日(月)～11日(金)

目 的：アジア・アフリカ地域の多言語資料の
選定・収集・整理に関する調査

訪問先：

1. SOAS (The School of Oriental and African Studies, University of London) Library

資料は全て開架とし、参考資料を集めたReading Roomを地域ごとに設置するなど、多言語資料へのアクセスを担保する工夫がなされています。また、Unicodeに対応した図書館システムを採用し、原綴りでの目録提供も行われています。

日本の大学の廃棄資料を譲り受けるプロジェクトや、各国の大使館を通じた寄贈など、様々な方法で、多言語資料の収集に取り組まれているとのことでした。

2. The British Library

— Asia, Pacific and Africa Collections —

その歴史的背景から、インド関係の資料を中心に、大きなコレクションを蔵しています。

ナショナル・ライブラリーとして、多種多様な資料を収集されていますが、最近では、対象となる資料の増大に対応するため、大学図書館や

研究機関との分担収集なども検討課題となっているようでした。

3. Cambridge University Library

Cambridge大学の多言語資料は、原則として、研究図書館であるUniversity Libraryへ集中配置されています。

従来から、原綴りでの目録提供のため、様々な工夫をされていましたが、近々、多言語版の図書館システムを導入し、目録の原綴り化に取り組まれるとのことでした。

また、いずれの館も、NCOLR (National Council on Orientalist Library Resources) の活動や、総合目録構築など、多言語資料を扱う図書館間の連携事業に参加されていました。C-DATSが目指す史資料ハブ機能の実現に向けて、今後、こうした機関間連携の促進が重要性を増してゆくと思われます。

末筆ながら、今回、このような機会を与えていただき、また、諸々に渡りご尽力くださいました、C-DATS関係者の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

(上田誠治・前嶋淳子)

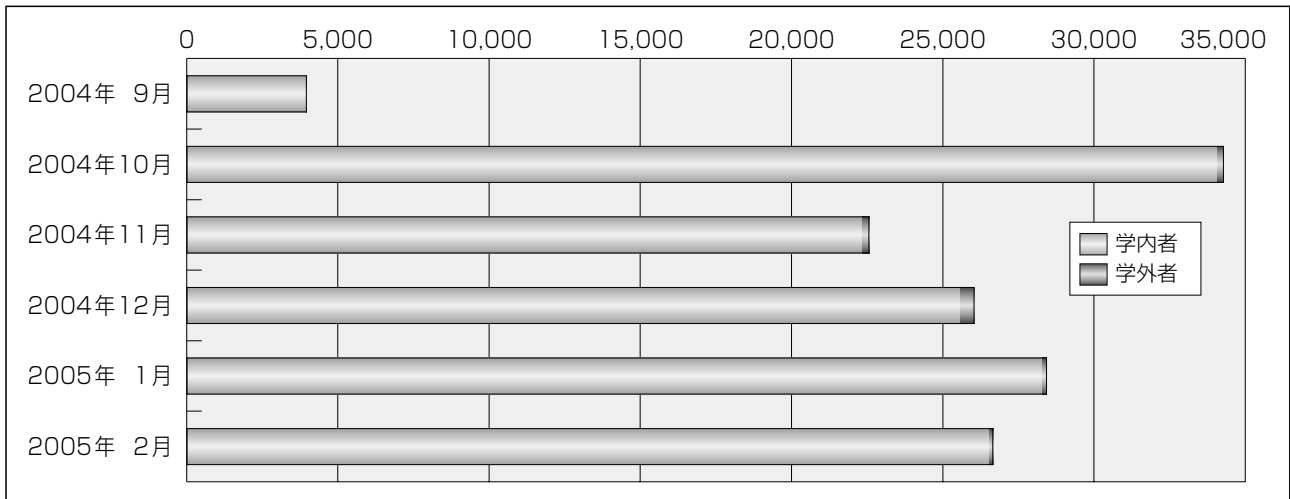


▲ The British Library 遠景

図書館統計

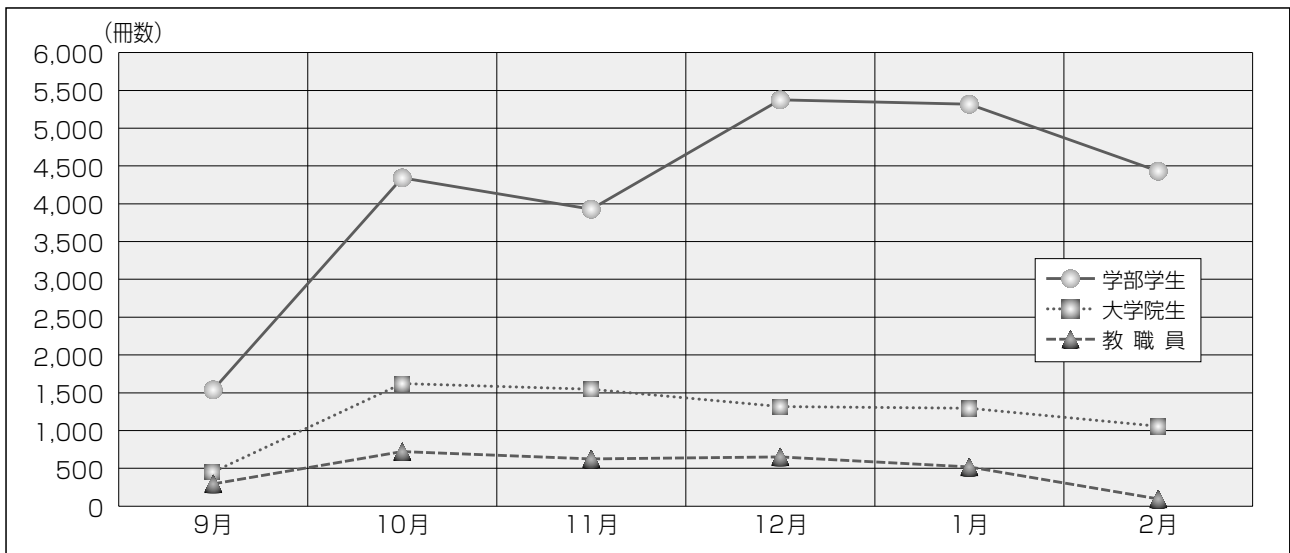
(月別入館者統計・貸出冊数統計)

月別入館者統計



	2004年 9月	2004年10月	2004年11月	2004年12月	2005年 1月	2005年 2月
学 内 者	3,914	34,064	22,321	25,571	28,258	26,498
学 外 者	50	223	244	472	183	165
合 計	3,964	34,287	22,565	26,043	28,441	26,663

貸出冊数統計



	2004年 9月	2004年10月	2004年11月	2004年12月	2005年 1月	2005年 2月
学部学生	1,539	4,341	3,928	5,373	5,316	4,431
大学院生	453	1,620	1,546	1,317	1,292	1,054
教 職 員	294	719	623	651	518	94
合 計	2,286	6,680	6,097	7,341	7,126	5,579

- 10月21日(木) 東京都高等学校進路指導協議会による視察
- 10月22日(金) EUIJ図書WGと駐日EU代表部担当者との会議 1名参加(於駐日EU代表部)
- 10月25日(水)～11月22日(月) 平成16年度貴重書(カンボジア語資料)展示会
- 10月27日(水) 平成16年度第3回選書委員会
- 10月27日(水) 平成16年度附属図書館講演会(樺山紘一氏)
- 11月16日(火)～11月19日(金) 大学図書館職員講習会 2名参加(於東京大学)
- 11月19日(金) 平成16年度国立国会図書館職員外部機関実習 4名受入
- 12月 7日(火)～12月 8日(水) 第17回国立大学図書館協会シンポジウム(東地区) 受付け者1名派遣(於東京学芸大学)
- 12月15日(水) 平成16年度第4回選書委員会
- 1月26日(水) 平成16年度第5回選書委員会
- 1月26日(水)～ 1月28日(金) NII学術情報リテラシー教育担当者研修1名参加(於国立情報学研究所)
- 2月 6日(日)～ 2月12日(土) 本学21世紀COE「史資料ハブ地域文化研究拠点」史資料保存・共有・情報化事業により、イギリスに2名派遣
- 3月16日(水) 平成16年度第3回図書館委員会
- 3月18日(金) アジア情報関係機関懇談会 1名参加(於国立国会図書館関西館)

編 集 後 記

館報「カスタリア」は年2回発行ですが、お手元の本号は通算第9号に当たります。

また春が巡って新入生をお迎えする季節となりました。図書館では毎年新入生を対象にした情報リテラシー授業やオリエンテーション、ガイダンスを行っています。図書館ホームページにも、図書館に関する情報が満載されています。図書館は知識の宝庫です。図書館の利用法を存分に会得すれば、これからの学生生活に有意義に活かすことができるでしょう。

国立大学が法人化になって早くも1年が過ぎました。法人化の厳しい試練の中でも、図書館はこの逆境に負けず、利用者へのサービスを向上させるべく、さまざまな努力をしています。

平成16年度は概算要求により、文部科学省から「多言語データベースシステム」構築のための経費を獲得して、ロシア語新分類図書・個人文庫の遡及入力を行っています。またロシア語・ヒンディー語・アラビア語の原綴とLC翻字間の双方向変換システムの開発にも取り組んでいます。ポーランド学の泰斗、故吉上昭三先生遺贈のポーランド語図書の整理も進んでいます。

21世紀COE「史資料ハブ地域文化研究拠点」の電子図書館システムDilinsへの図書登録冊数も5,000冊を超えて、順調に発展を続けています。

館員一同、利用者のために一層の努力をいたします。ご要望・ご意見をお寄せください。

Castalia : 東京外国語大学附属図書館報 第9号

2005年3月31日発行

発 行 : 東京外国語大学附属図書館 〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

電 話 : 042-330-5193 ホームページ : <http://www.tufs.ac.jp/common/library/index-j.html>

印 刷 : 三鈴印刷株式会社